

# 第 6 回 福島学習の旅 報 告



2024年11月10日(日)～11日(月)

日本退職教職員協議会 福島県退職教職員協議会

(一財) 全国退職教職員生きがい支援協会



## 記

- 1 実施日時 2024年11月10日(日)  
~11日(月)
- 2 集合・学習会会場  
福島県教育会館  
11月10(日)13:30

福島県教育会館  
福島県福島市上浜町10-38

- 3 参加費 20,000円



## 日程・行程

1日目 2024年11月10日

集合 福島県教育会館 13:30 受付

14:00 学習会開会

日退教挨拶

福島県退教挨拶

講演・学習会

14:00~15:00 学習会 「原発事故からの教訓(仮)」  
講師 国分俊樹さん(元福島県教組委員長)

15:10~16:20 学習会 「東日本大震災と原発事故(仮)」  
講師 山崎健一さん(元福島県立高校社会科教員)

## ホテルサンキョウに移動・チェックイン

18:00 懇親交流会 ホテルサンキョウ



地図 ホテルサンキョウ

2日目 11月11日(月) フィールドワーク

行程（予定） 現地福島と調整中

8：30 福島教育会館出発



「東日本大震災原子力災害伝承館 請戸小学校」など

16：50 JR 福島駅着 解散

参加人員 20名（10月27日現在、現地退教含まず）

費用 2万円（宿泊・交流懇親会・フィールドワーク時昼食弁当・バス代等全て含む。）

受付時に集めさせていただきます。後日清算いたします。

その他（1）当日福島県教育会館集合 午後1時30分

（2）宿泊は「ホテルサンキョウ」で部屋はシングルです

（3）道悪のところを歩くことも予想されますので、そのつもりで履物を。

連絡先 日退教事務局長 平岡良久 携帯 090-1102-8709

震災遺構・浪江町立請戸小学校



請戸小学校が位置する請戸地区は、津波による死者が127名、行方不明者27人と多くの犠牲が出ました。海から約300mに位置する請戸小学校でも、誰も経験したことのない長い揺れに襲われました。校舎には下校した1年生11人を除く、2年生から6年生までの児童82人が残っていました。教職員はすぐに児童に対し避難を促し、避難場所に指定されている学校から約1.5キロメートル離れた大平山を目指しました。（ホームページページより）

東日本大震災・原子力災害伝承館



**東日本大震災・原子力災害伝承館**  
福島県双葉町にある県立の施設です。東日本大震災の地震、津波、原発事故について数多くの実物・映像資料を展示し、防災・減災に向けて情報発信しています。

## 大堀相馬焼付近見学

2011年3月に東日本大震災および東京電力福島第一原子力発電所事故が発生。浪江町全体が避難区域となり、全町民が避難を強いられました。震災前20軒以上あった窯元、そして職人たちも全国へバラバラに避難を余儀なくされ、産地としてのコミュニティは完全に寸断されてしまいました。さらに、大堀相馬焼特有の青磁釉の主原料である砥山石も、放射能汚染のため使えなくなってしまったのです。



## 道の駅なみえ(トイレ休憩を含む)

浪江産品の、買う・見る・食べるが叶う道の駅がオープン。請戸漁港で水揚げされたばかりの新鮮な魚介類を使ったお刺身や海鮮丼が楽しめます。またここでしか手に入らない「なみえ焼そばコッペパン」や「なみえ焼そばソフト」などオリジナル商品も多数販売。変化している浪江町の今が分かる、流行発信地です。





相馬 焼 窯 元

## 第 6 回 日退教福島学習の旅 報告

東京退教 藤崎喜仁

日退教は福島県退教と共催で「福島原発事故から 13 年半『福島』の今を学ぶ」の「第 6 回福島学習の旅」を 11 月 10 日～11 日にかけて実施した。参加者は東北・関東・近畿・四国からの総勢 21 名で、学習会会場の福島県教育会館に向かった。

### 一日目

#### 学習会 「福島原発事故から 13 年半～被ばく当初に考えたこと、行動したこと～」

《講師 国分俊樹さん(元福島県教組委員長)》

自宅は郡山市にあり放射線量が大い「放射線管理区域」だったが家族避難を断念し、この自宅にあれから 13 年 8 カ月も住み続けている。

国分さんは 2010 年 4 月から福島県教組の専従役員だった。

原発事故が起きてから、子どもと教職員の安全や被災教職員の勤務・労働条件の行政への申し入れ

原発・放射能・放射線情報の組合員への発信 学校始業日の延伸の要請を取り組んだ。また、被災地「フクシマ」の状況を全国に発信する団体を発足し、「福島県平和フォーラム」を中心とした集会の企画・運営に深く関わった。

その傍ら原発事故に伴う放射線量が人体や食品に与える影響等について専門家のように学んだと云う。2011 年 3 月には「原発災害を絶対許すな!」の福島県教育新聞を全職員に発刊し、それ以降も「子どもの被ばく線限度量基準(年間 20 ミリシーベルト)」の問題点や「プール沈殿ゴミの汚染の実

態」等や放射能に関する疑問や基礎知識など教職員に向けて発信し続けた。2012年10月には「放射能について Q&A」を盛り込んだ職場討議資料「生きるための学び」(32P)の発刊に深く関わった。

2014年には日教組63次全国教研集会で『『フクシマ』の食事情2013』を報告した。

ここには給食に使う県内産の食材の安全性の問題を訴え、県は「風評被害」対策も含めて放射性物質検査機器を導入し、県内59市町村の学校給食食材の測定が確立されたと云う。

食事=給食は「エサ」ではない。安全と安心が当たり前で、放射能検出されないことが前提となる。しかし現状は「子どもの安全より地場産業の保護」が主流。「復興」「未来」が盛んにプロパガンダされるが、福島の未来は子どもである。食に限らず生活の「安全」「安心」を納得しない限り、県民の流出は止まらない。原発事故から国やマスコミの情報は信用できず、「はじめに統治ありき」の内容に怒りと国の情けなさを感じると訴えた。

書籍「子どもたちに残そう 核のない地球」(日退教・福島県退教・福島県教組共著)2012

「子どもたちのいのちと未来のために学ぼう 放射能の危険と人権」明石書店 2012  
の発刊に国分さんは県教組役員として多大な貢献と尽力をした。この二冊は発刊後に入手して私の手元にありあらためて読み返してみた。文科省の『放射線副読本』に関する批判や放射能に関する基礎知識など、多くが盛り込まれ誰もが学べる名著と云える。これらに関わった国分さんの功績は大きいと思った。

### 学習会 「原発事故難民として考える」

《講師 山崎健一さん(元福島県立高校社会科教諭)》

山崎さんは「平和」「人権」「環境」の3つから世の中を見ていくといろいろ見えてくると云う。3つのテーマに沿った活動はあまりにも多く紹介しきれない程だが、新聞投書や9条の会・日退教の学習に発信してきたものは多くの方に伝えたい貴重な証言と記録だ。

山崎さんが教員になった1968年6月頃福島第一原発の建設現場を高台から見学した。標高35mの海岸段丘を25mも削り、標高10mへ原子炉建屋を建設している様子や赤茶けた山肌も記憶に残っている。恐らく壁面から地下水が湧き出ていたと思う。それが現在の汚染水になっている。

ちなみに女川原発は14.8mの高さで建設され、外部電源5本中1本が通じて冷却回復した。福島第二原発は12mの高さ、外部電源4本中1本が通じた。第一原発は外部電源7本中7本が喪失した。原子炉4基もメルトダウンは世界に例がない。原発が外部からの電気を頼りに動いているとは...

建設されず日本を救った福島県の「棚塩原発」の話は初めて知って驚いた。「珠洲原発」と同じように建設されなかった「浪江・小高(棚塩)原子力発電所」は、福島第一原発から北へ10km地点の浪江町と南相馬市小高地区にまたがる棚塩地区に予定されていた。

棚塩地区は3.11の時182名の犠牲者が出た。東北電力が1967年建設を計画。反対同盟が結成され計画から46年を経た、3.11事故後の2013年3月東北電力は建設を断念した。反対同盟舂倉さんら3名は、土地隆を売らずに闘い建設中止に追い込んだ。

福島第一原発1号機の爆発をとらえた「無人カメラのスクープ」も知って驚いた。

2011年3月11日福島中央テレビは、第一原発1号機の水素爆発の映像をとらえた。報道制作局長佐藤崇(山崎さんと中高の同級生)は、4分後県内に放送した。キー局の日本テレビは1時間後に全国放送し、14日の3号機爆発とともに世界を駆け巡るスクープとなった。この無人カメラは原発から17kmm離れた大鷹鳥谷山794mに設置されていた。NHKや民放の無人カメラは原発から6km範囲に設置されており電源切れだった。

広島・長崎の放射性汚染を警鐘した映画監督 亀井文雄(1908生)や原発事故を予見した詩人若松丈太郎(1935生) 憲法の間接的起案者鈴木安蔵(1904生)の3人の偉人を紹介してくれた。安蔵の旧家の保存・修復活動にも関わっており、山崎さんは反原発・反戦平和・護憲の活動を精力的に発信している。

福島市に投下された模擬爆弾 福島市渡利の瑞龍寺に展示されている鉄の破片は原爆を投下するための「模擬爆弾」だった1945年7月20日に投下され、この地区に住む当時14歳の少年が犠牲となった。「模擬爆弾」は全国で49発投下され、福島県内では福島市・郡山市・いわき市で5発確認

されていると云う。(翌日バス車中での話しから)  
私の知らないことばかりで山崎さんの博識ぶりに敬服し学びの多かった学習だった。

## 二日目

### フィールドワーク バス車中での学習と施設見学

《講師 柴口正武さん(福島退教事務局次長)》

震災後家族・親戚の離散の実情を語ってくれた。浪江町の実家には 2012 年 10 月に一次立ち入り。長女はこの立ち入りが最後。柴口さんは相馬市へ、家族は二本松市の父方本家といわき市の母方本家に避難する。その後家族は千葉や埼玉、茨城の親戚に避難。

2020 年 7 月 浪江町の実家を解体する。両親は避難先で相次いで亡くなる。コロナ禍で解体を見届けたのは柴口さんだけだった。

2011 年東電が出した「廃炉に向けた中長期ロードマップ」では、燃料デブリの取り出しが開始されるまでの期間が 10 年以内となっていた。しかし、「小規模」取り出しが「試験的」取り出しに変更、3 度も延長し 2024 年 11 月 7 日ようやく実施された。

だが 0.7g しか取り出せずデブリは 1 号機から 4 号機まで総計 880t もある。0.7g は 880t の僅か 3 億分の 1 の量であり、全てを取り出すのはもはや不可能に近いと思う。

イギリスの廃炉状況では、2150 年を完了予定にして年間 4000 億円必要と云う。126 年後の廃炉まで 50 兆 4000 億円がかかる。

子どもの数は震災前の 12.5% で、大幅な回復傾向には程遠い。浪江町は 9 つの小中学校が 1 つの浪江創成小・中学校になったが、小(48 名) 中(24 名)である。また自治体の居住人口も浪江・双葉・大熊・富岡の 4 つの町は、双葉の 0.0%、大熊の 2.4% など移住は極めて困難になっている。

車中では柴口さん、竹中(福島退教事務局長)さん、山崎さんの 3 人が案内人となって、震災同時の状況や復興状況を話してくれた。またその土地にまつわる歴史や遺構など、様々なエピソードを交えて説明してくれ意義ある車中学習でした。

### 《原子力災害伝承館 見学》

昨年に続き私は二度目の見学となった。展示物等は変わっていなかった。しかし、プロローグ(導入シアター)のナレーターは、西田敏行だったが本人の容姿が消されてアバターになっており違和感があった。

展示室の配置は以下のようになっている。

災害の始まり 「事故前の暮らし」として子どもたちの学校生活の記録や原発が出来たころ、双葉町が設置した『原子力明るい未来のエネルギー』看板の写真もある。東日本大震災の「地震と津波」の映像記録や写真、壊れたホストなどの展示物。原発事故後の新聞や証言映像。原子力災害対策センターに残る記録など。

原子力発電所事故直後の対応 避難開始の証言映像や避難所となった体育館で使われた石油ストーブとか毛布など展示、原発避難の一週間の軌跡の映像など。また、放射線への対応として防じんマスクや防護服やヨウ素剤の展示も。

県民の想い 原発事故で突然故郷を奪われた県民の様々な想いの証言映像がある。

落下した天井板や割れた蛍光灯の紹介や黒板に残されたメッセージ、津波で漂流したランドセルなどガイドブックに写真として載っているがここには展示物は無い。同じく

学校生活の思い出・変化のコーナーも映像だけ。証言映像は全て 1 分 3 名である。

映像に集中しないと通り過ぎてしまうコーナーだ。

長期化する原子力災害の影響 除染・風評の払拭・長期避難の対応等専門家の解説映像があり、防護服やフレコンパックの展示はあるが分かりにくいコーナーと思った。

復興への挑戦 復興について 3 人の映像証言、廃炉作業の映像、みらいのまちの模型の展示、福島イノベーション構想としてロボットやドローンの展示が。併せて廃炉・ロボットドローン・航空宇宙・農林水産業の写真パネルの展示。他には教育・人材育成・産業集積・情報発信など写真と説明



が書かれているパネル展示。

復興への挑戦とは政府主導の国家プロジェクトとして、失われた地域の産業基盤の回復を構想している。

海のテラスから海岸を眺めた。津波を被った田畑を整地する作業が進んでいる。この周辺を「福島県復興祈念公園」として整備するための工事で平成 26 年閣議決定された。

岩手には「高田松原津波復興祈念公園」、宮城には「石巻南浜津波復興祈念公園」の建設も進んでいると云う。

### 《震災遺構 浪江町請戸小学校の見学》

ここも私は三度目の見学となった。学校周辺がどんどん変わっていきススキの原っぱだった所は整地している最中だった。大平山が近くに見えて見通しの良い広大な土地がひろがっている。ここに住宅が出来るのか、工場が出来るのかは分からないが防潮林にする松の苗木畑も広がっていた。

校舎階段下には今年も咲いたと思われる直径 20cm ほどの桜の木が自生し時の流れを感じる。壁も天井も津波で破壊され、無残な様子の校長室の倒れた大きな金庫。給食室の大きな錆びついた数個の大釜が悲しげに見えた。体育館は卒業証書授与式の看板、床はめくれ上がりぼこぼこだ。一階は吹きさらし状態なので、遺物も日々劣化と風化を重ねていくと思う。

校舎二階は教室がそのまま残されている。津波はわずか 10cm の浸水だったので、当時を偲ぶ展示になっている。卒業生の黒板に書かれたメッセージもそのまま展示されている。

黒板のメッセージを映したパネルもあった。「請戸復興する!! 武士道の国 日本 陸上自衛隊 連帯」の展示が。片付けに関わったと思われるがやや違和感があった。

請戸小は福島第一原発から 5.7km の近さ、二階教室から建物の様子や廃炉作業のクレーンもはっきりと見えた。

### 《大堀相馬焼の里 見学》

この地区の神社の立ち姿が美しかった。また入口には復興祈念碑があった。

少し歩くと大堀相馬焼の窯元が何軒も集まっていた場所に着く。立派な建物だった住居や釜小屋は廃墟と化していた。中を覗くと焼き物が棚に陳列されたままや床にたくさん散乱していた。慌てて避難した様子が分かり物悲しい。放射線量が高くて立ち入りは短時間だったが、歴史の重さと深さを感じた不思議な空間だった。

ここはそのまま「原発被害の遺構」として残しておく価値があると思った。

### 《車中から見た復興の様子など》

かつて道の両側は雑木や雑草に覆われた耕作放棄地と、ススキやセイタカアワダチソウが延々と続いてきた。それが汚染土を詰めた黒いフレコンパックの巨大な山が席卷していった。それが撤去され代わって目につくようになったのはソーラーパネルだった。多くのパネルは多大な電力を生み出しているが、蓄電出来ないので捨てられている現実もある。

田畑も耕作され稲を刈り取ったあとの田んぼや、野菜を収穫したあとの畑も多く見られた。しかし、除染不可能な地域も多くあり、山林の除染は手つかずのまま放棄されている。福島県の広さは東京・千葉・神奈川・埼玉の 4 県合わせたよりも広い。13 年半の歳月はかつての住民が元の土地に戻ることに殆ど不可能にしてきた。この福島復興をどう考えたらよいのか。思いつくことは伝えることしか出来ないもどかしさだ。

核燃料デブリは人も物も近づけないほどの強大な放射線を出し続け、直接デブリに触れた「核汚染冷却水」の海洋投棄はこれからも続く。880t のデブリは試験的に 0.7g 取り出せたただだ。どれだけの期間冷やし続ければ良いのか、海洋投棄が終るのは何年後になるのか誰も全く見通せない。石棺で覆って動かさないことも選択肢の一つとさえ思う。

核燃料デブリが存在する限り福島復興と未来は、100 年経っても方向が見通せず終わりのない模索が続くに違いない。バスの車中から見えたススキの原っぱと白い穂は、大きく静かに波打つように揺れてとても美しかった。

以上